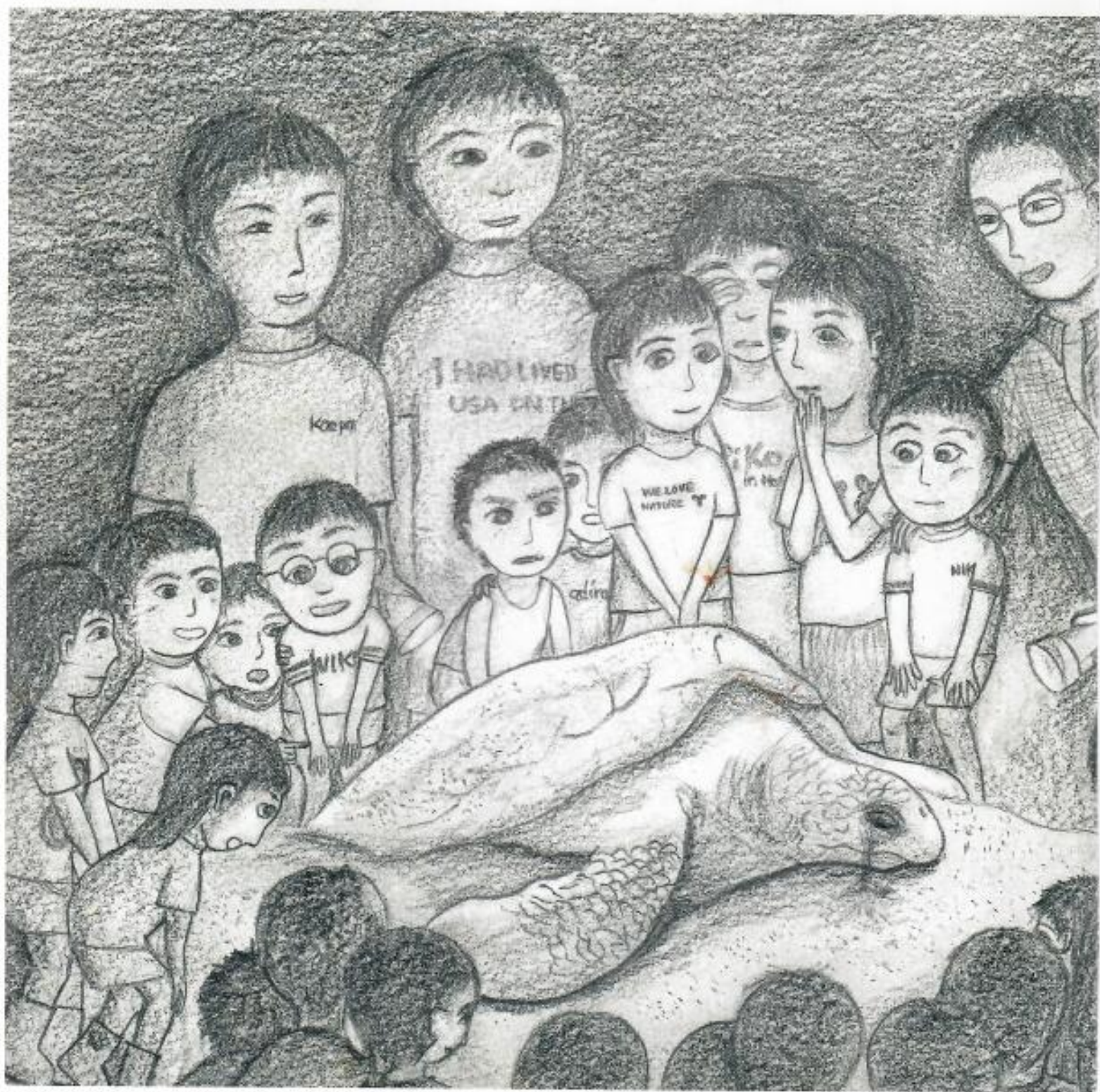
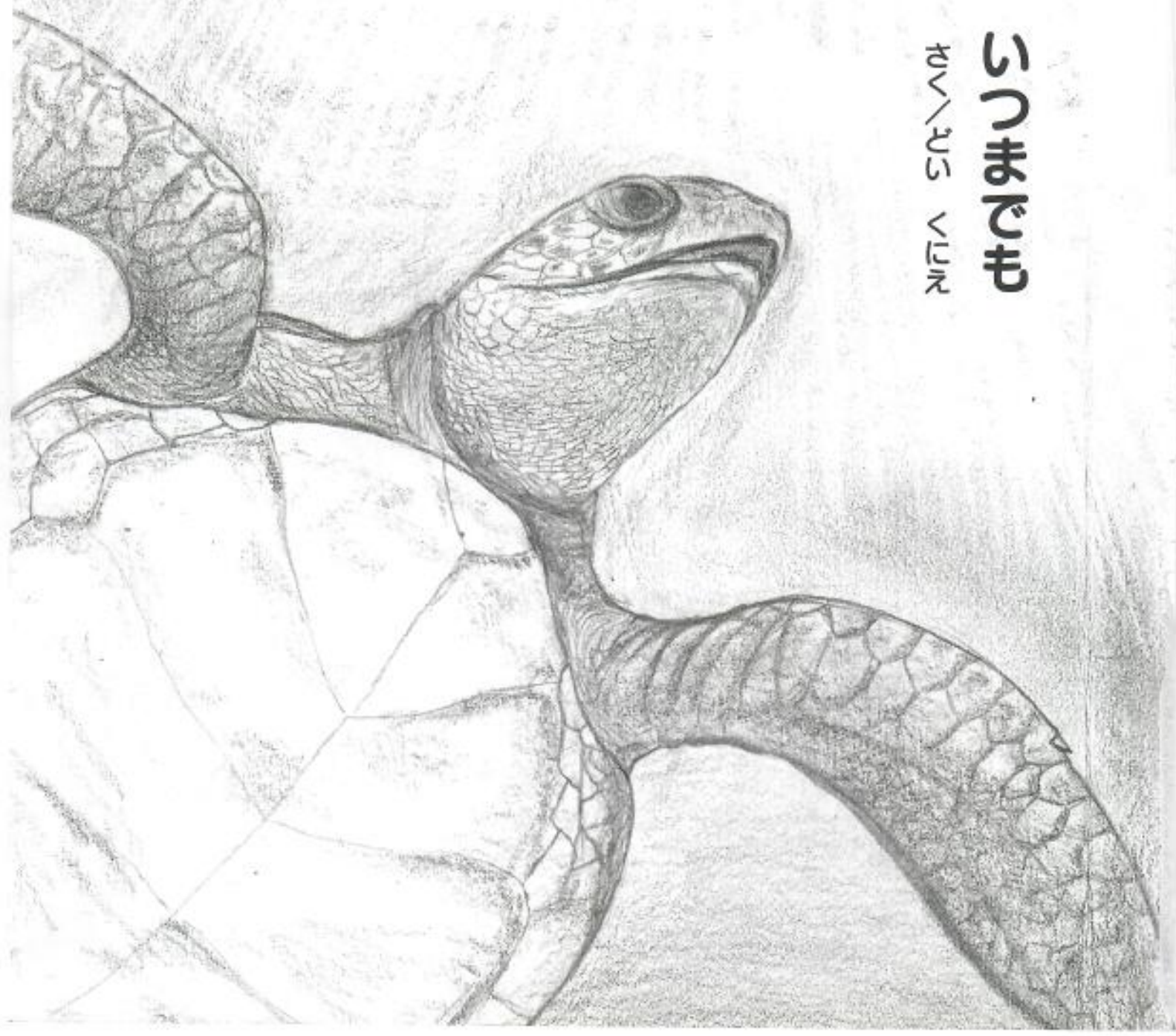


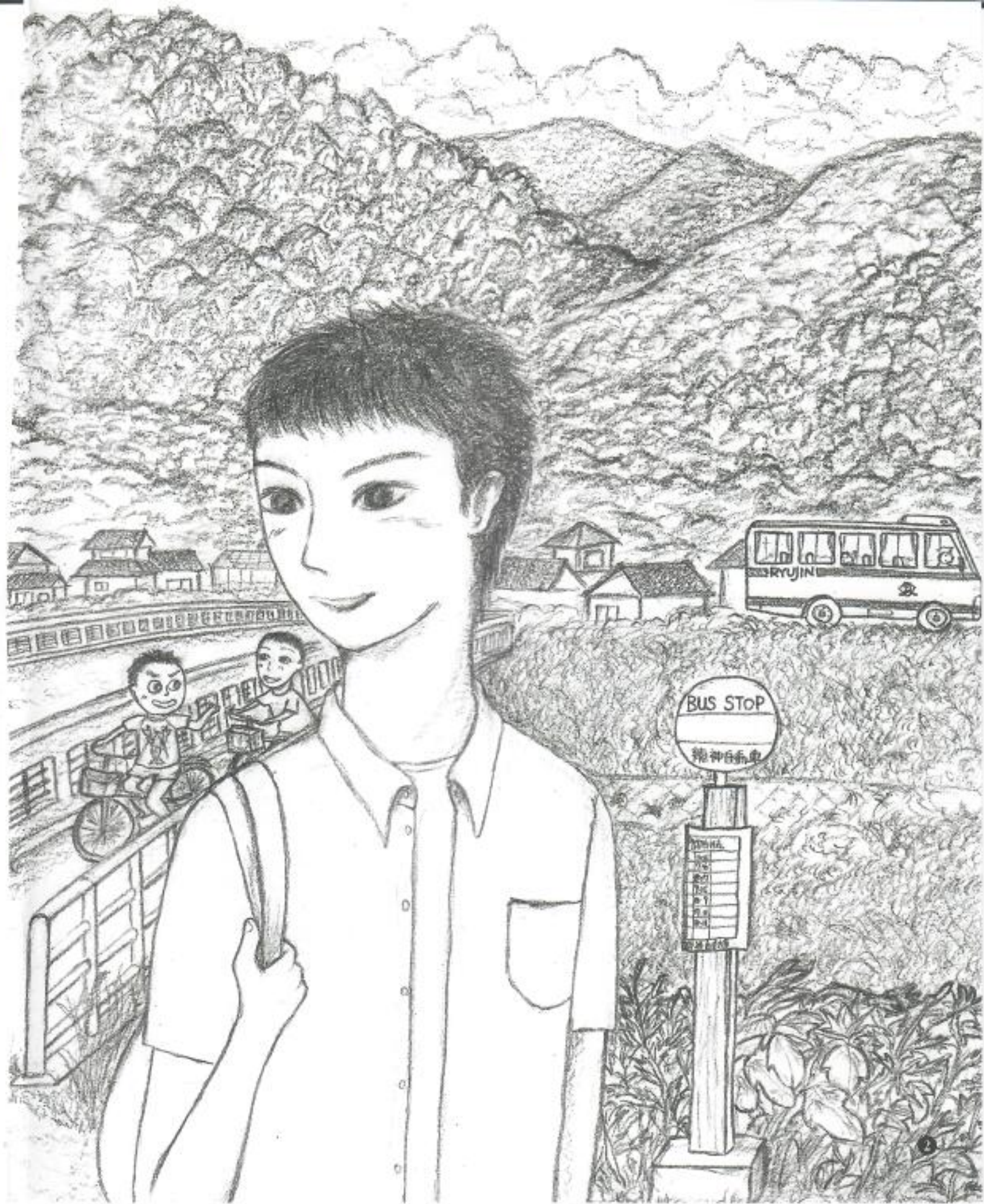
# ウミガメよ いつまでも

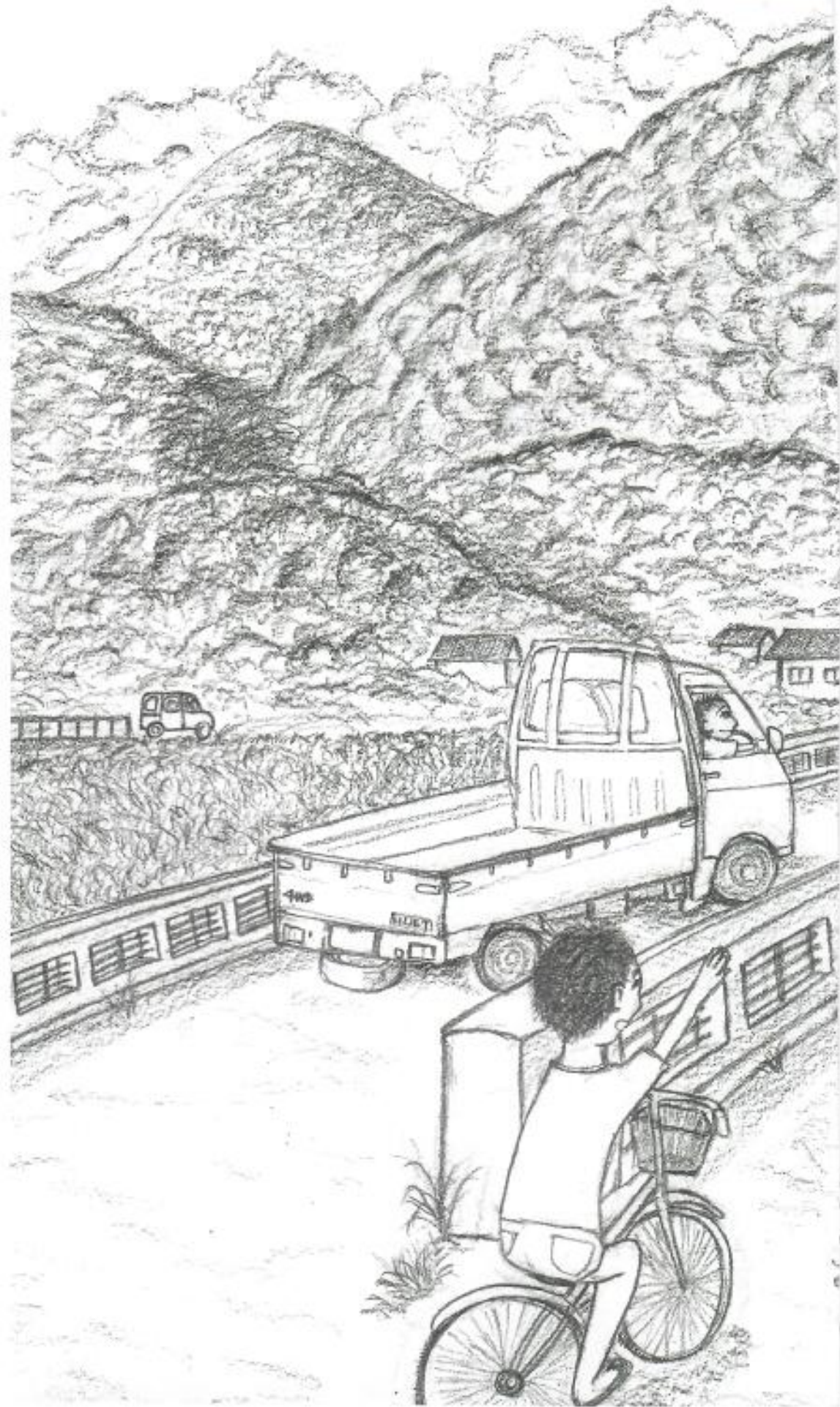


ウミガメよ  
いつまでも

カウチス ヴィン







「ひさしぶりやなあ」

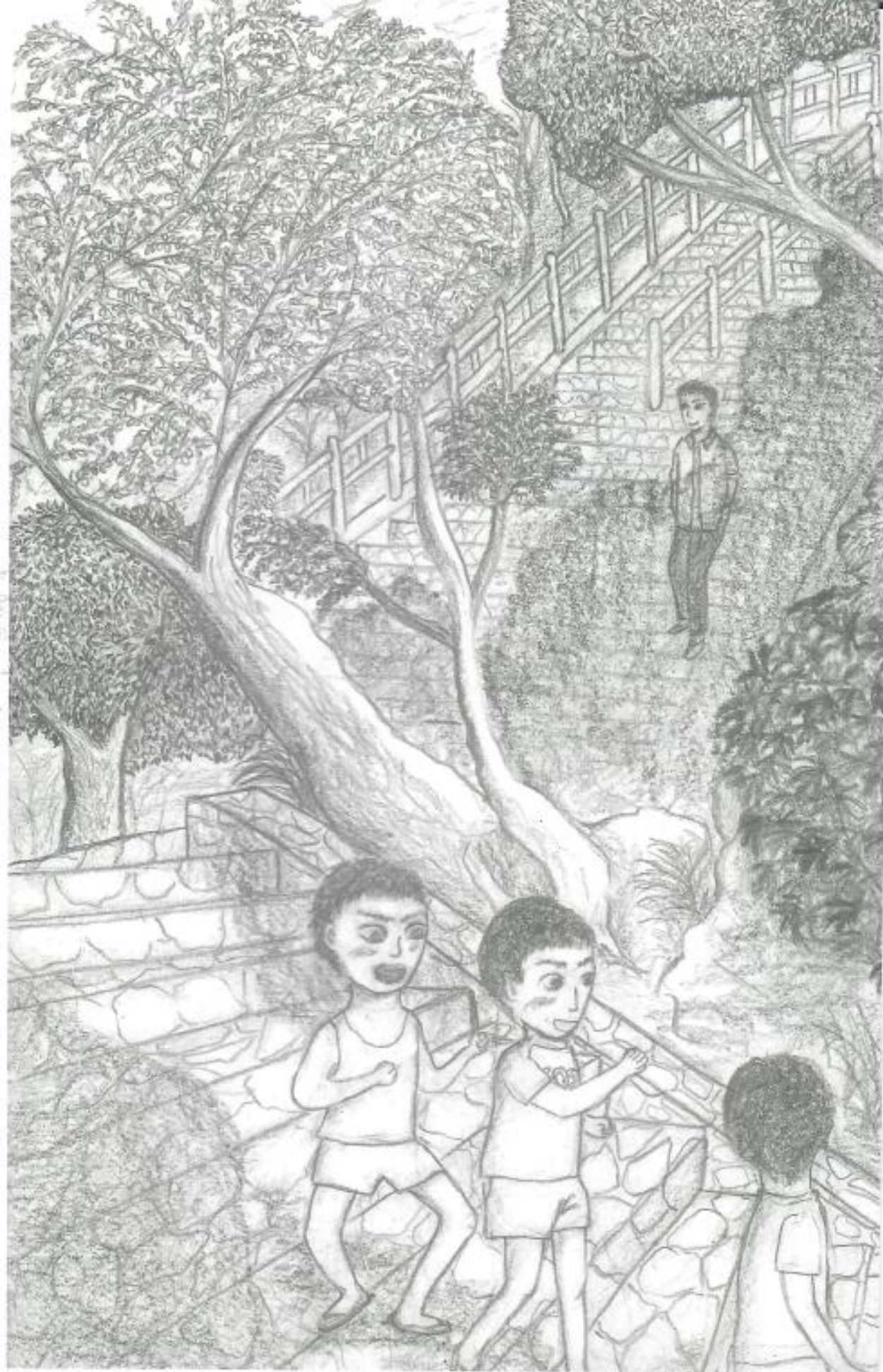
ほくは、大学の夏休みで、みなべに帰ってきた。

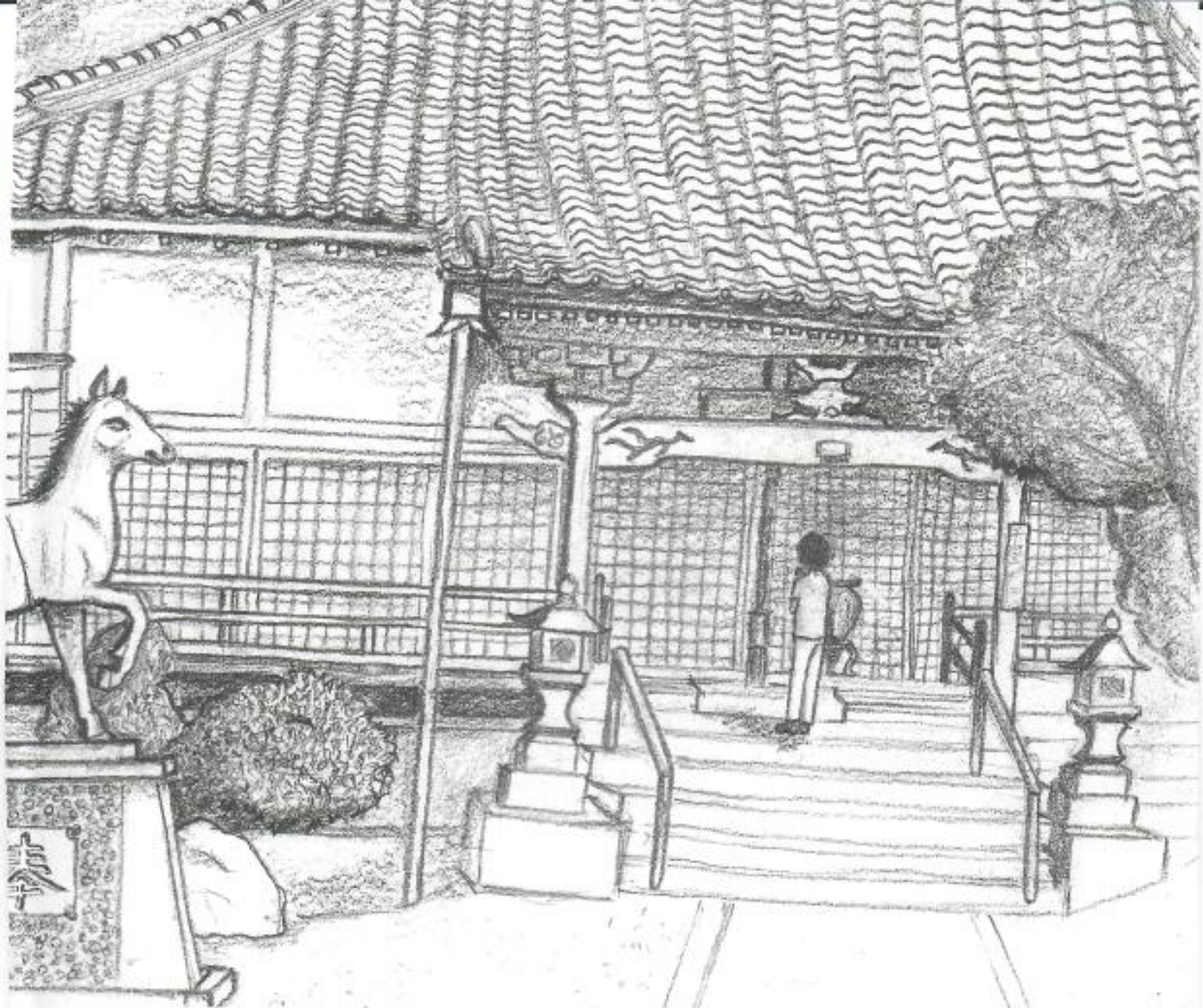
きのう、幼なじみの尾田君に、青年団でとりくんでいるアカウミガメのパトロールにさそわれた。

ほくは夜が待ちきれず、こどものころよく遊んだ千里の浜にやってきた。



千里の浜に出るには、駐車場ちゆうしゃじやうじやうになっている高台たかだいから、雑木林ざつぼくやしにかこまれた石段いしだんを左に右にまがりながら  
おりていく。とちゅう、観察くわんさつする人たちのとまる小屋もある。おりきったところが千里観音堂せんりくわんおんどうだ。





「かんのんさま、おひさし  
ぶりです。  
ぼくは、大学生になりました。  
今晚ウミガメのパトロール  
にきます。  
どうか、ウミガメに出会え  
ますように！」





千里観音堂には、小栗判官がぎざんだと伝わる馬頭観音さまがおまつりされている。

伝説によると、むかし小栗判官が熊野の温泉で病をなおして、その帰り、この南部の沖で嵐にあったそうだ。

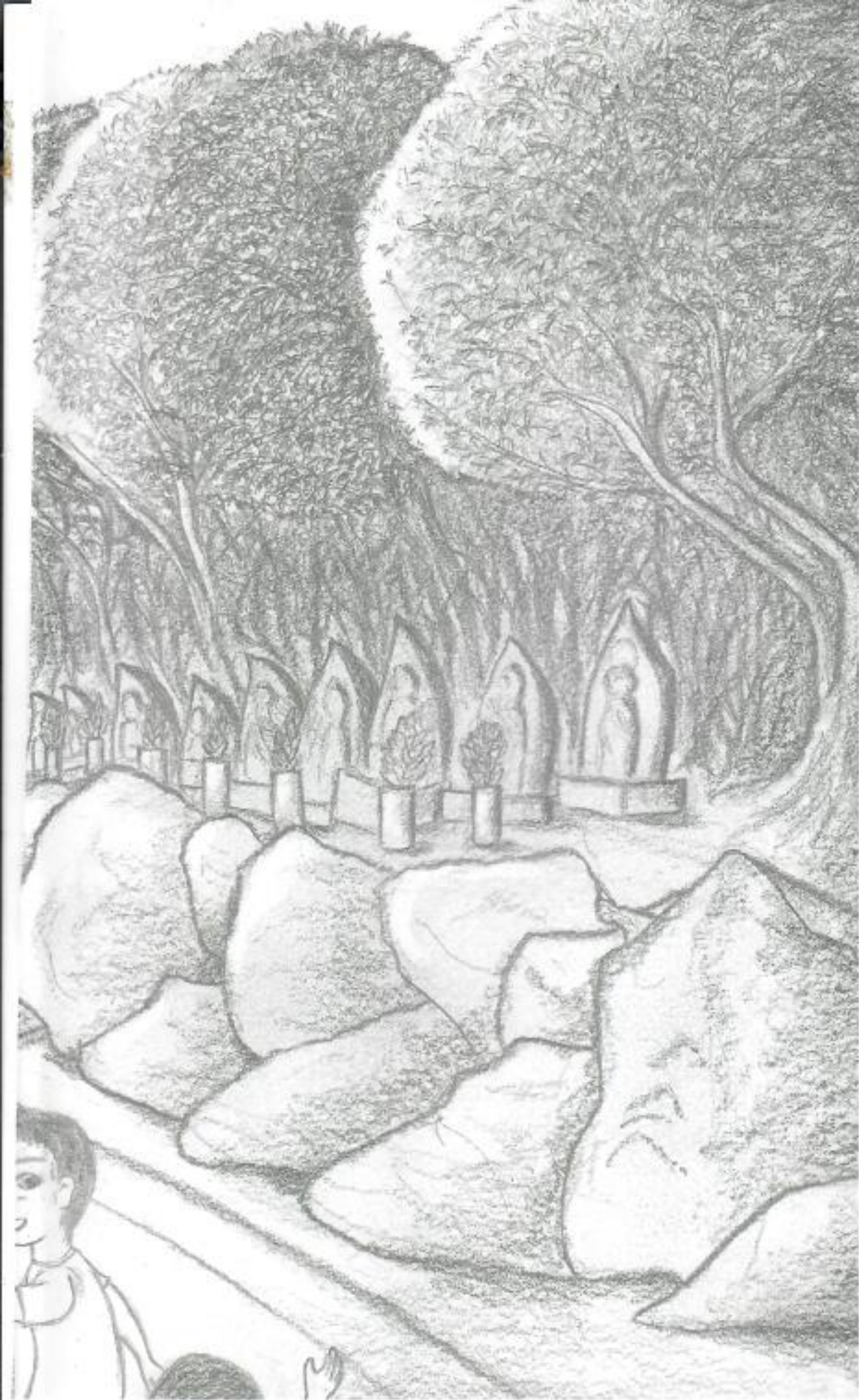
漂流していたところを白い馬に助けられて、この千里の浜に打ちあげられた。ところが、小栗判官を助けたのは、白い馬ではなくて流木だったそうだ。それで小栗判官はこの木に観音さまをきざんで、おまつりしたそうだ。それがこの観音堂だ。

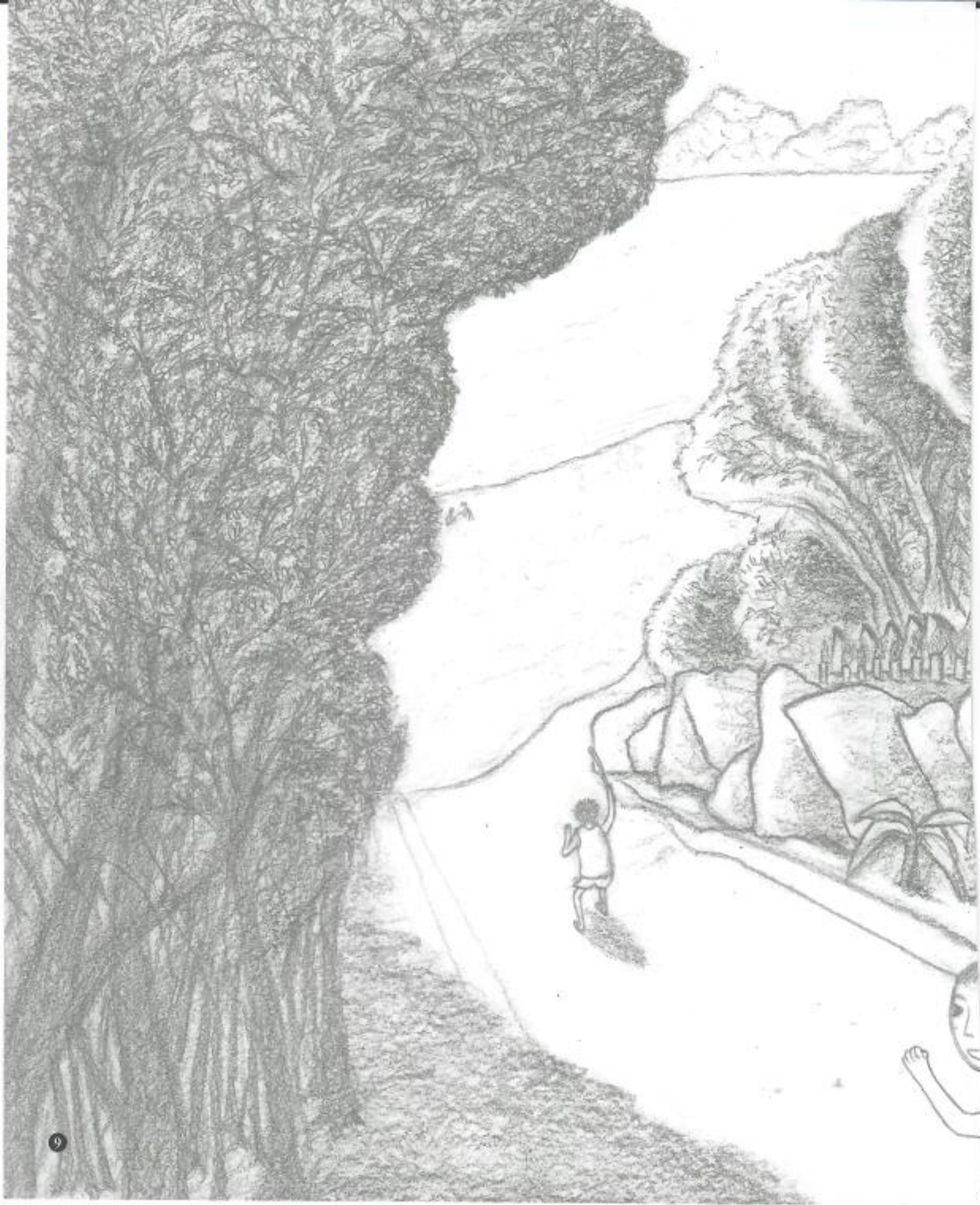
おまいりをすませてうしろを振りかえると、山門の向こうに海が見える。

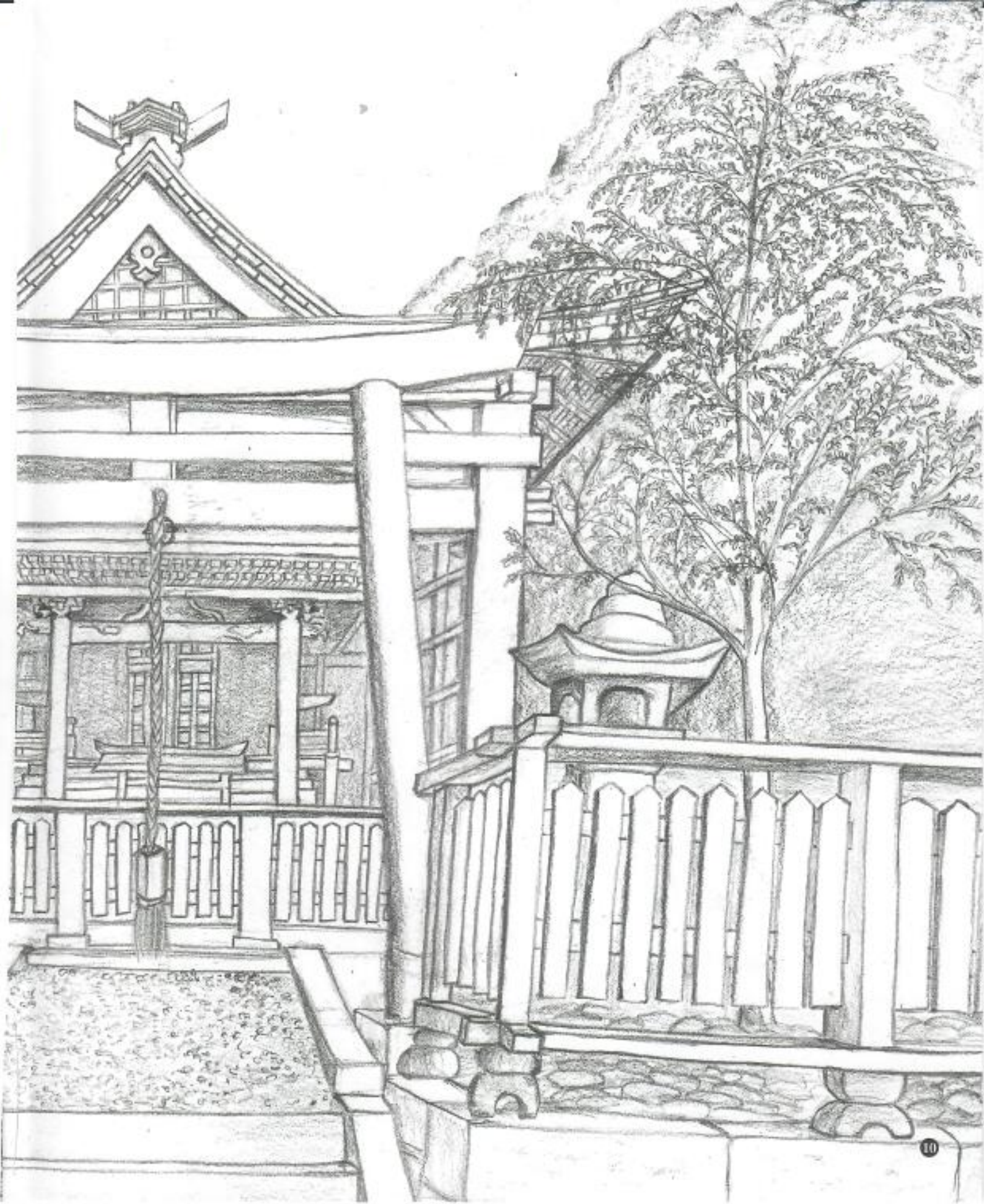
観音堂は海側からおまいりするようになっていたんだ！



キラキラまぶしい海に向かって、ほくは走りだした。  
あまりにもまぶしくて、ほくは目を細めた。  
砂浜すなはまにおりる前に、ほくは千里王子せんりおうじにたちよった。

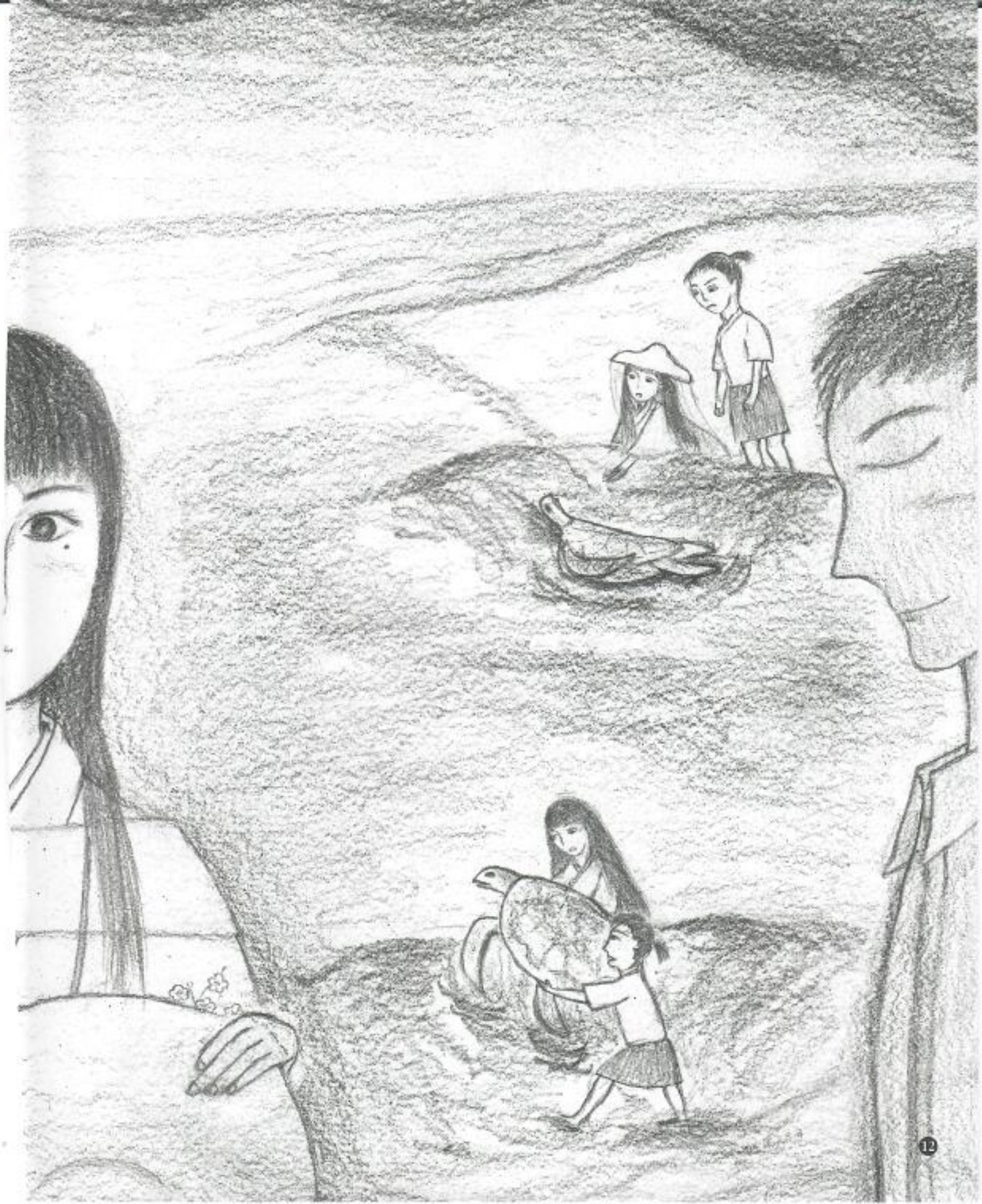






千里王子は、熊野におまいりする道中にある、たくさんの王子社のひとつだ。  
万葉集や伊勢物語にも出てくるから、千年以上も前から知られた景勝地なのだ。  
しかも、熊野古道ではここだけ、浜辺を歩く道として有名なのだ。  
ほくは、小学生のとき、千里王子のほこらのうらで眠ってしまったことがある。







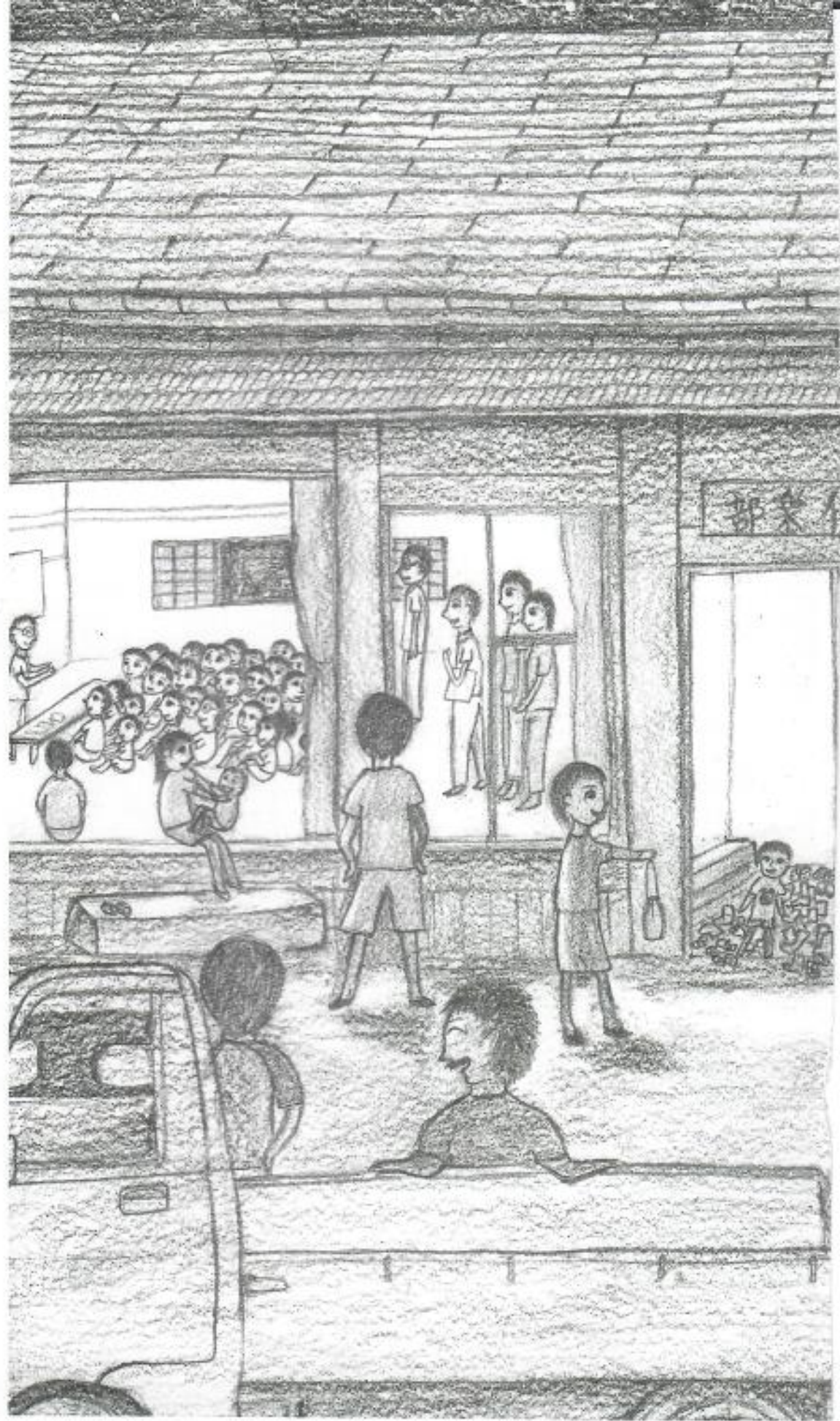
海風が涼しくて、ついつい眠ってしまったのだろう。  
そのとき、ジャラーン、ジャラーン、ジャラーン……  
だれかがおまいりしているのか、鈴の音が聞こえた。  
それを遠くに聞きながら、ぼくは夢を見た。  
それはいつまでも忘れられず、ぼくの心の中にあった。  
鈴の音と少女…、そしてウミガメ…





青年団の尾田君と前田さんが、  
むかえにきてくれた。  
ほくは、ウミガメの産卵を見  
るのは初めてだ。  
そろそろ行こか」  
前田さんがいった。時計は八  
時半を過ぎていた。





「今夜はウミガメに来てもらわんと… 子どもが待ってるからな。」  
尾田君がいった。

ほくもそう願った。

いつもは静かな夜の休息室は、今夜はみなべの少年団の子どもたちでいっぱいだ。





千里の浜は、月の光と、遠くに浮かぶイカ釣り舟の小さな明かりだけ。

ときどきゴトンゴトン、ゴトンゴトンと、近くを通る電車が山とも空ともわからない暗やみの中を、小さな窓の明かりの列だけ残して、山の中へと消えていく。

ぼくらパトロール隊は、波打ちぎわを懐中電灯をつけずに歩いた。でも、月の光で海はかすかに明るい。

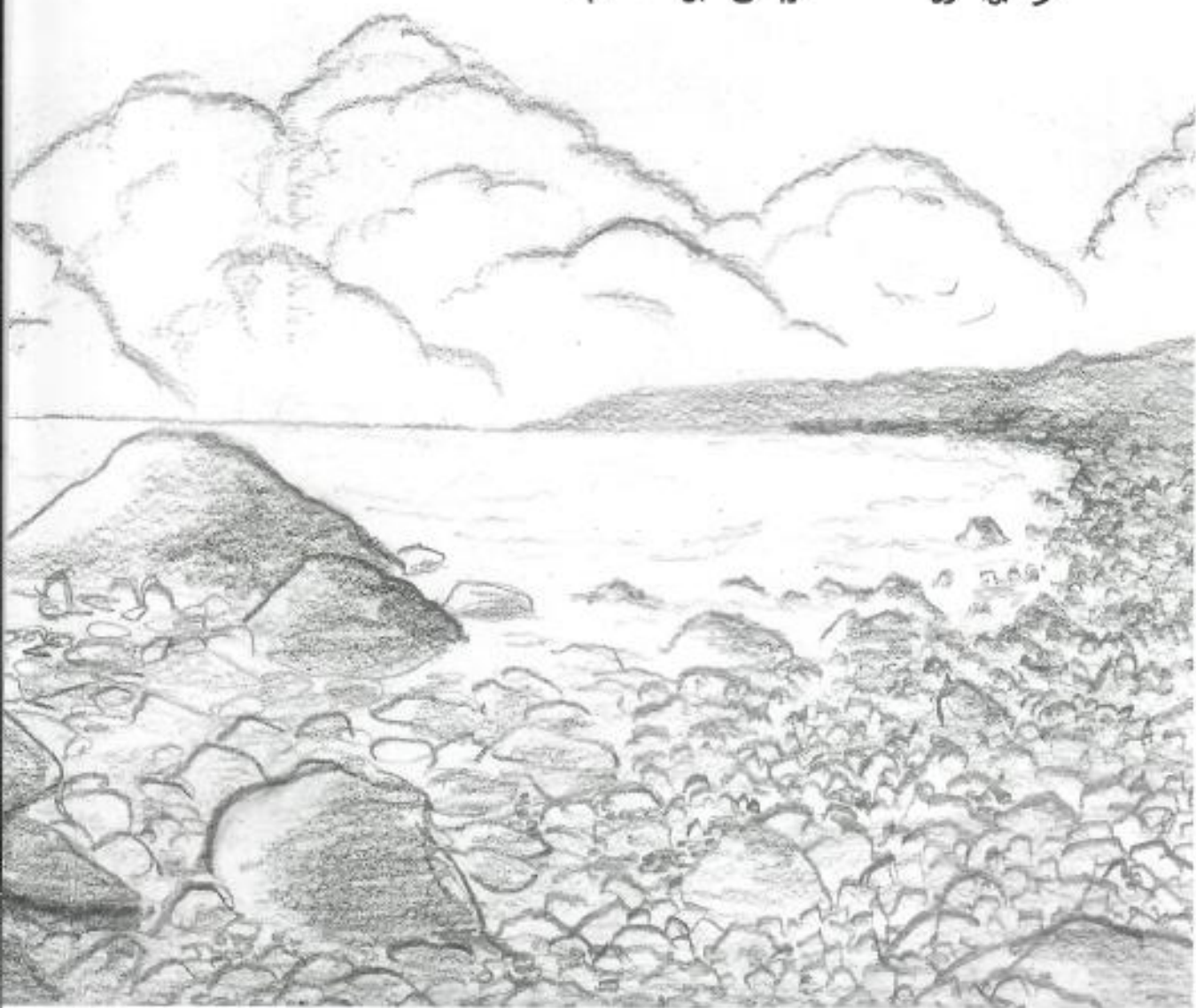
「三三三ほど、波がえるうて、カメがあがってきてないさか、今晚あたりあがってきてほしなあて、後藤先生がゆうてましたわ。ほいて、今夜はようけお客さんもおるし、ぜひとも来てもらわななあ……」

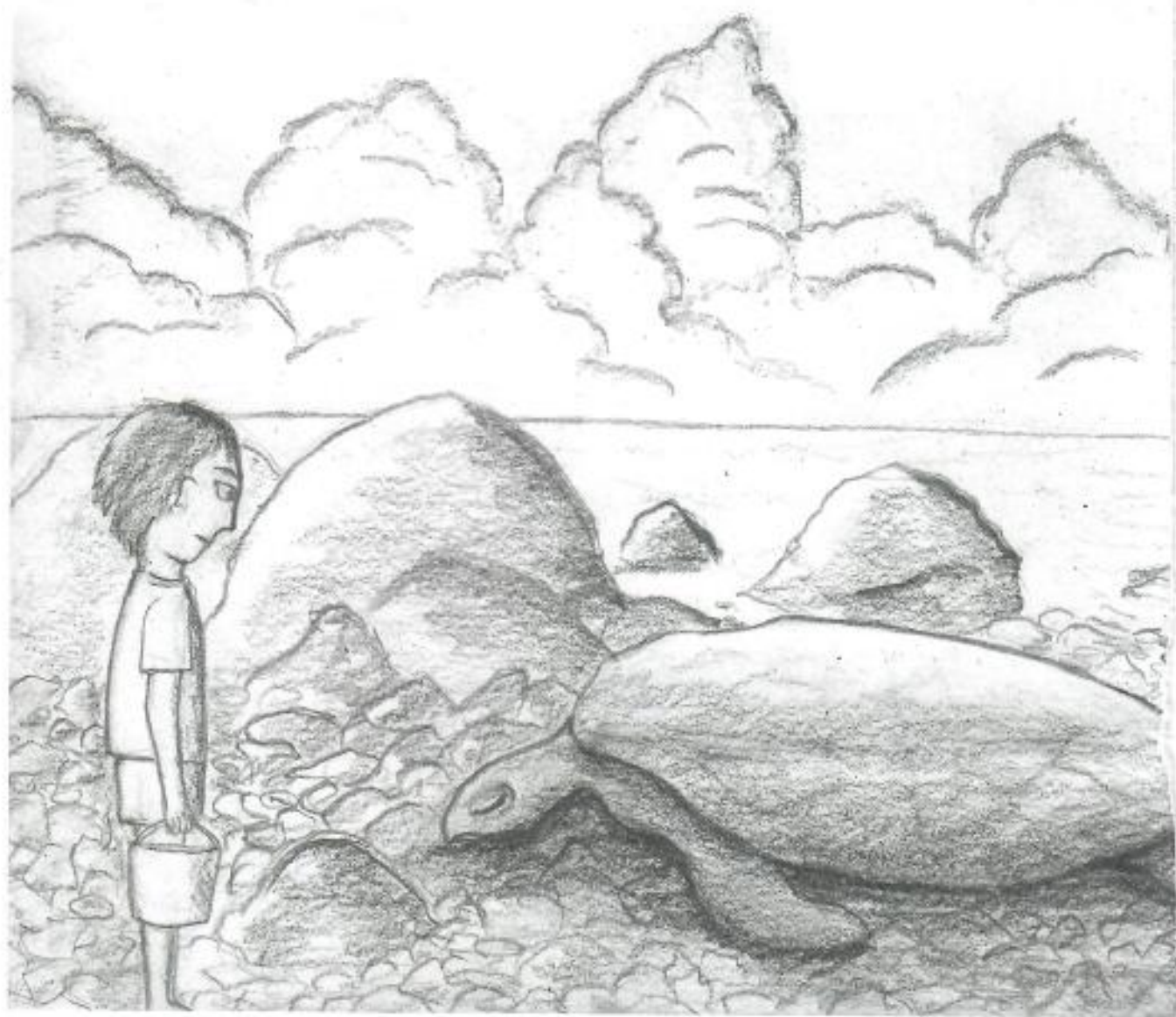
前田さんが小声でいった。ぼくらも、うなずいた。

ぼくは、小さい時、ここから少しはなれた岩代の浜で、大きなウミガメの死体を見たことがある。

お父さんは、

「千里の浜とまちごうて、あがつてきたんや。ここは岩場やさか、潮引いたとき、岩にはさまって動けんようになったんや。海にもどれんようになったんやな。」  
といていた。





パトロールをはじめて半時間。

「あ、いる、いる。」

前田さんが、小声で指さした。

「カメの足跡や。」

ほくはドキッとした。

前田さんは、毎年ウミガメパトロールに参加しているベテランだ。波でぬれた砂浜に、ウミガメの足跡が点々と続いている。

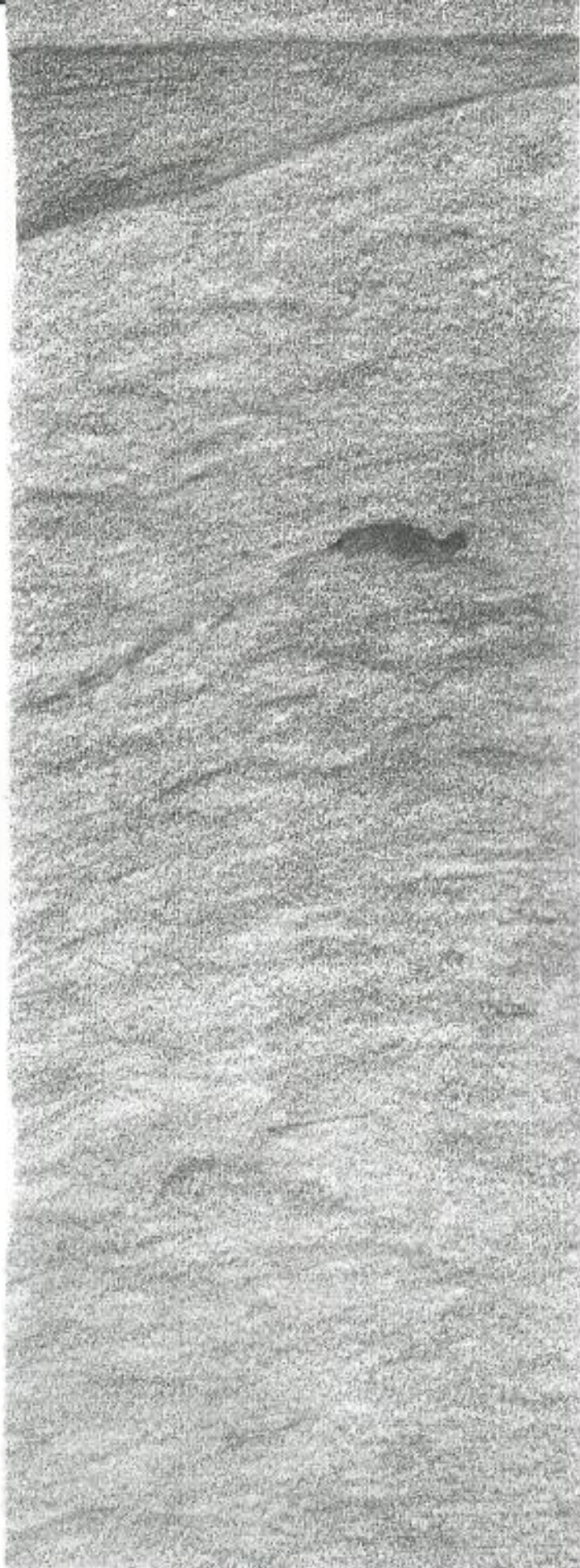
「おる、おる、あそこや。」

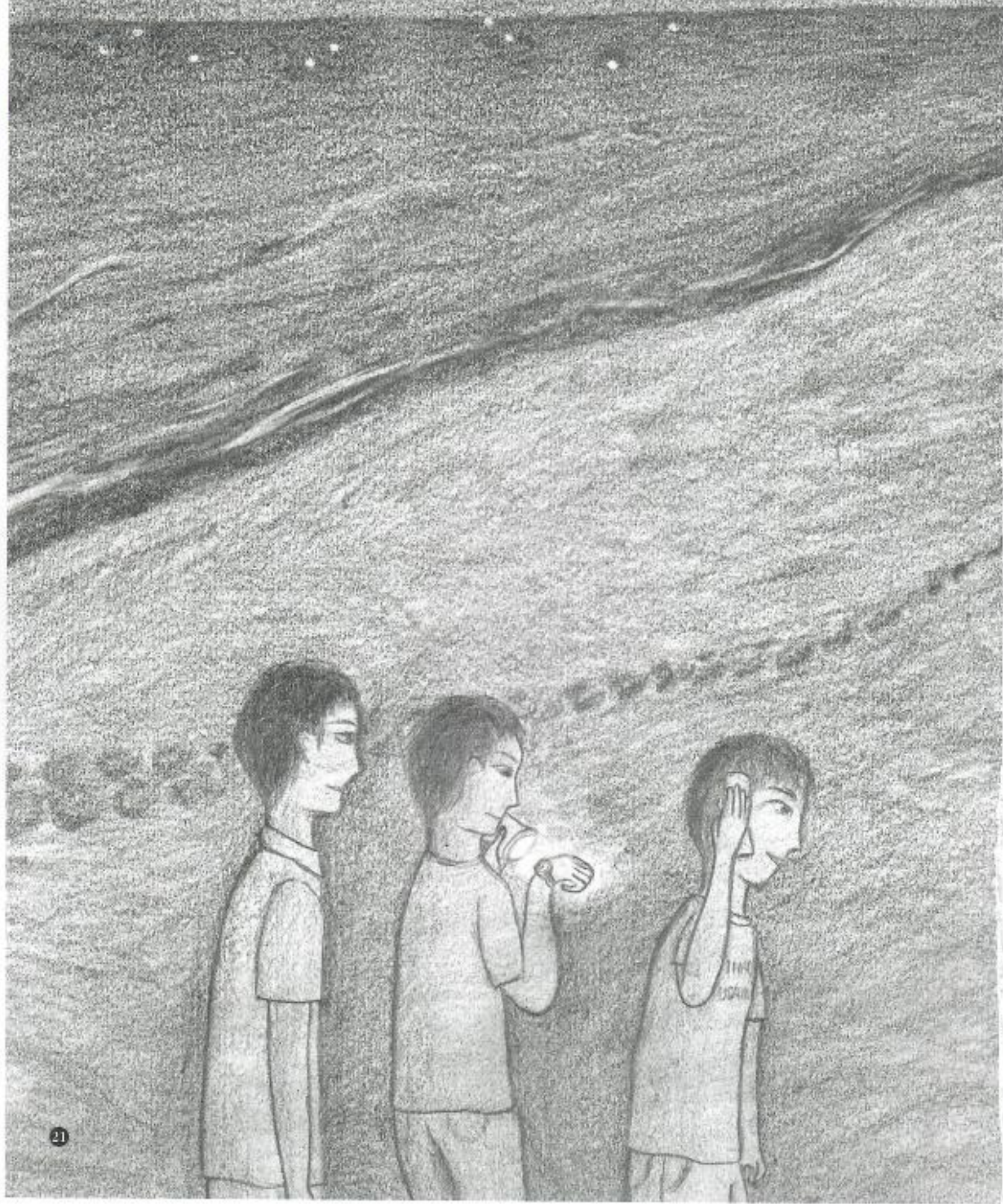
尾田君が見つけた。

ほくは目をこらした。大きい黒いものが動いている。

「先生に連絡するぞ。」

尾田君が無線機をとった。











トルルル、トルルル…

後藤先生の無線機がなった。

「ウミガメ、あがってきたようです。」

「フーイ、やったー」

いっせいに、子どもたちの歓声があがった。

ここに来たからといって、いつもウミガメが上陸してくるとはかぎらないことを、先生ははじめにちゃんと子どもたちに話していた。

後藤先生は、もう何十年も、ここでウミガメの調査や保護を続けている。

「はい、みなさん、さつきもゆうたけど、ウミガメは卵を産む場所をさがして、穴をほるのに三〇分くらいかかります。今ここで光を当てたり、やかましいゆうたら、海へもどってしまいます。もうちょっと、ここで待ちましょう。」

ウミガメは、前のひれ足と後のひれ足をパタッパタッと回すように、砂浜を上へ上へとはっていった。ほくたちは、はなれたまま、静かにあとをついていった。

ここで光をあてたり、音を出したりすると、ウミガメは海にひきかえしてしまふからだ。やがて、卵を産む場所を決めたのか、ウミガメは動かなくなった。

「よし、ほりはじめたぞ。」

ウミガメは砂まみれになって、いっしょうけんめいに穴をほっている。

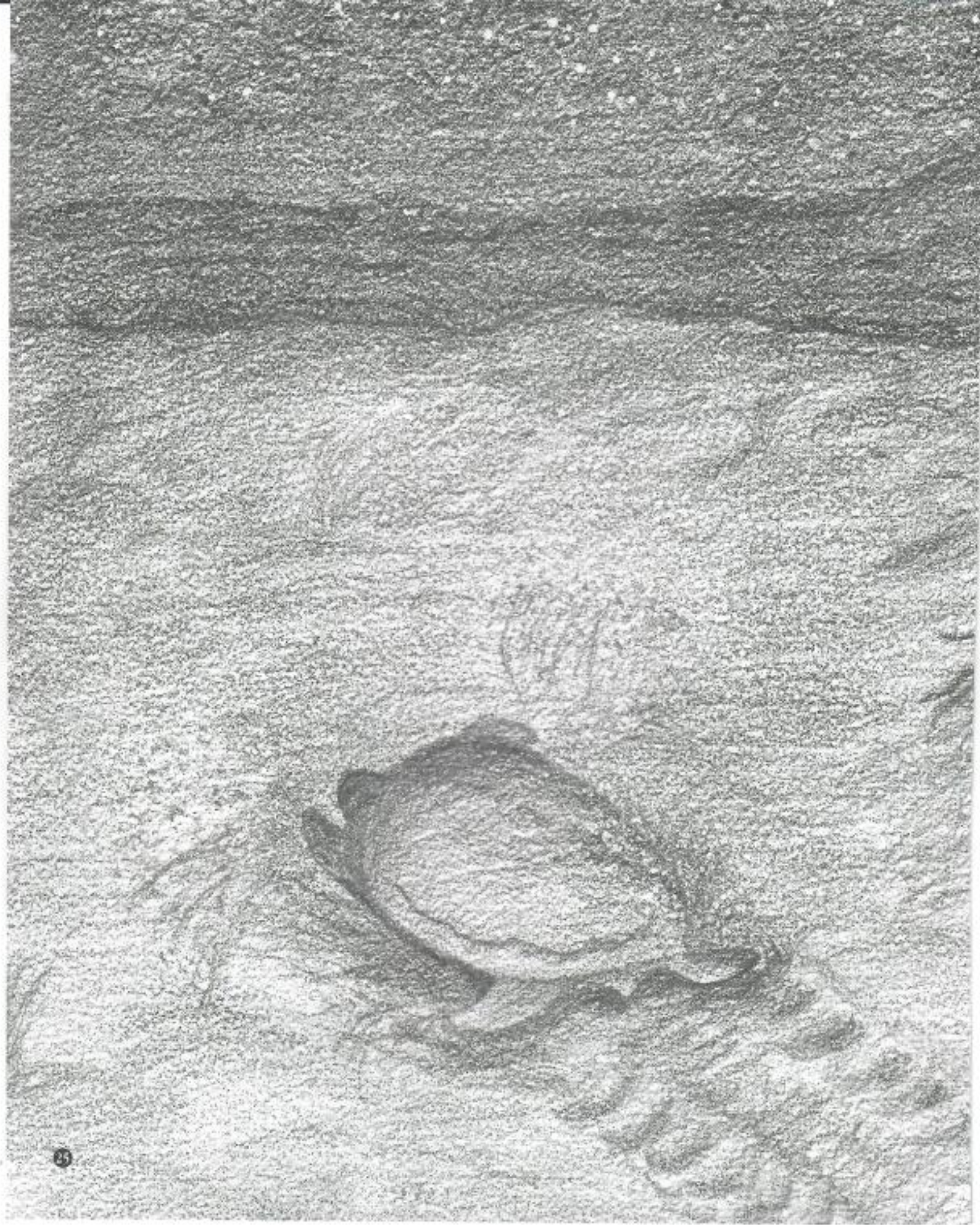
まずは前のひれ足でじふんの体をしずめる穴をほり、つぎに後のひれ足で卵を産みおとす穴をほっている。穴は五〇センチほどの深さ、卵は一度に一二〇個ほど産むそうだ。

卵は約二か月でかえり、子ガメはじふんで砂からはいでると、海へ向かっていく。でも、五千匹に一匹ほどしか、生き残れないそうだ。

「よくもどってきたなあ。ガンバレ、ガンバレ！」

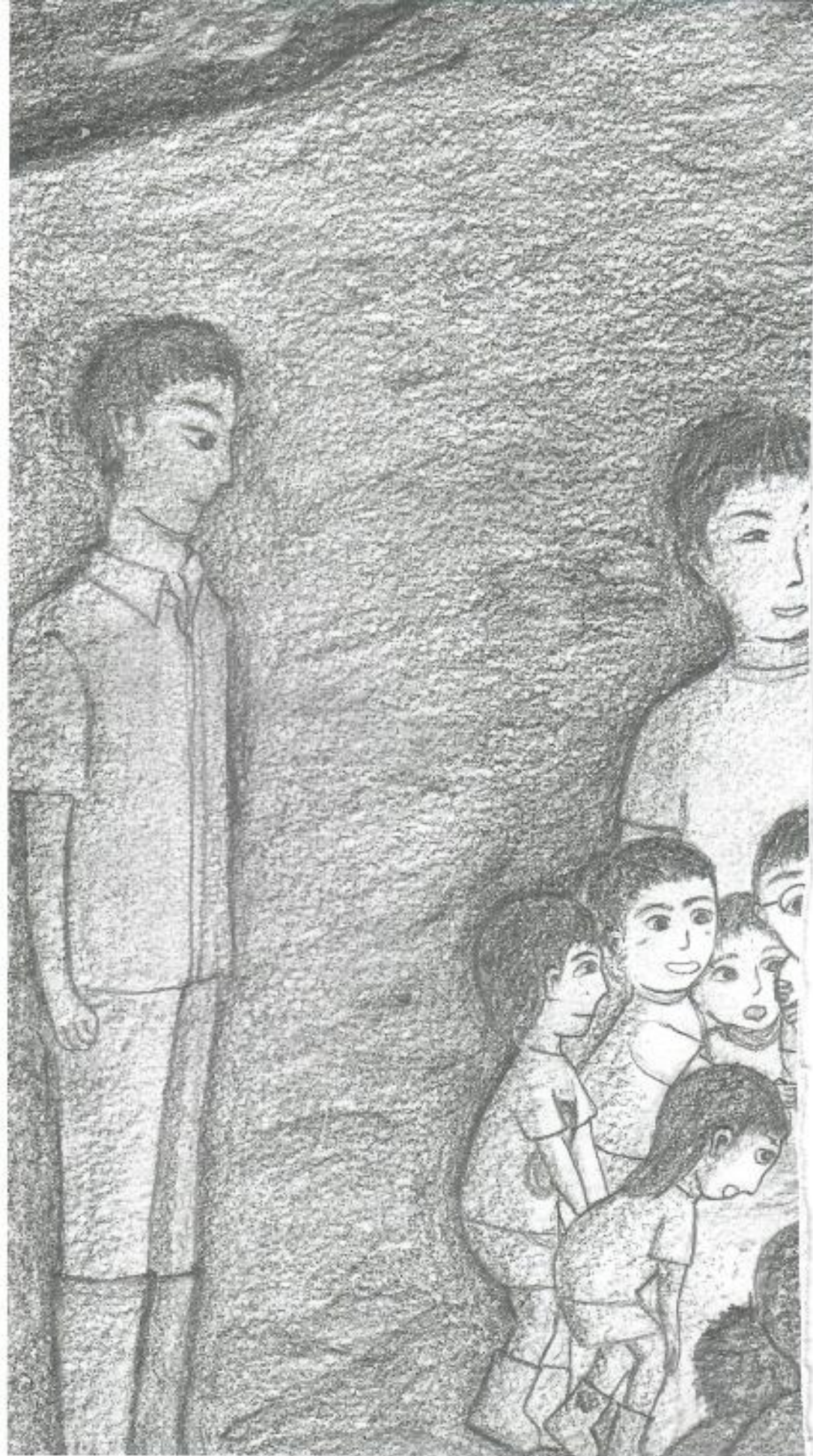
ほくは心の中でウミガメにエールをおくった。







「はい、それでは出発しゅつぱつしましょうか。」  
二度目の連絡れんらくを受けて、後藤先生ごとうせんせいはやっとOKオーケーを出した。  
ウミガメはいったん卵たまごを産みはじめると、人間が近づいてもじっとしている。  
ウミガメをとりかこむ子どもたちの小さな歓声かんせいと、笑顔えがお…  
その中で、静しずかに卵たまごを産み続ける母ガメのすがたに、ほくは胸むねが痛いたくなった。



子どもたちが帰ったあと、母ガメは最後の力をふりしぼるように、卵に砂をいっぱいかぶせて固めると、海へひきかえしていった。

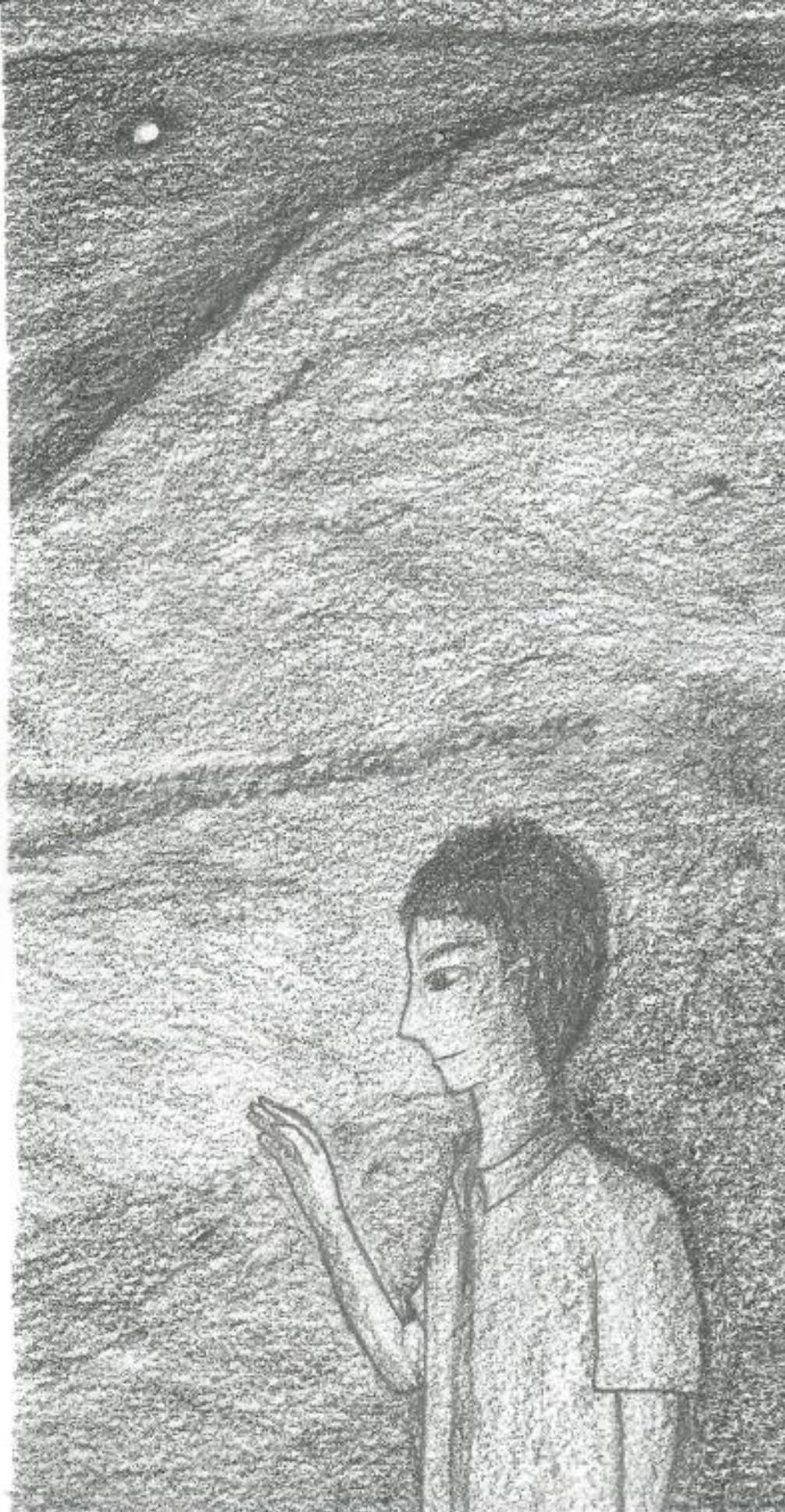
この母ガメは足にタグがついているので、きょうもここで卵を産んだことがわかる。

そのあいだ、このカメはどこまで旅をしていたのだろう。

ぼくは、来年もこの母ガメに会いたいと思った。

「また来いよ、かならず来いよ。」

※タグ＝目印のふだ





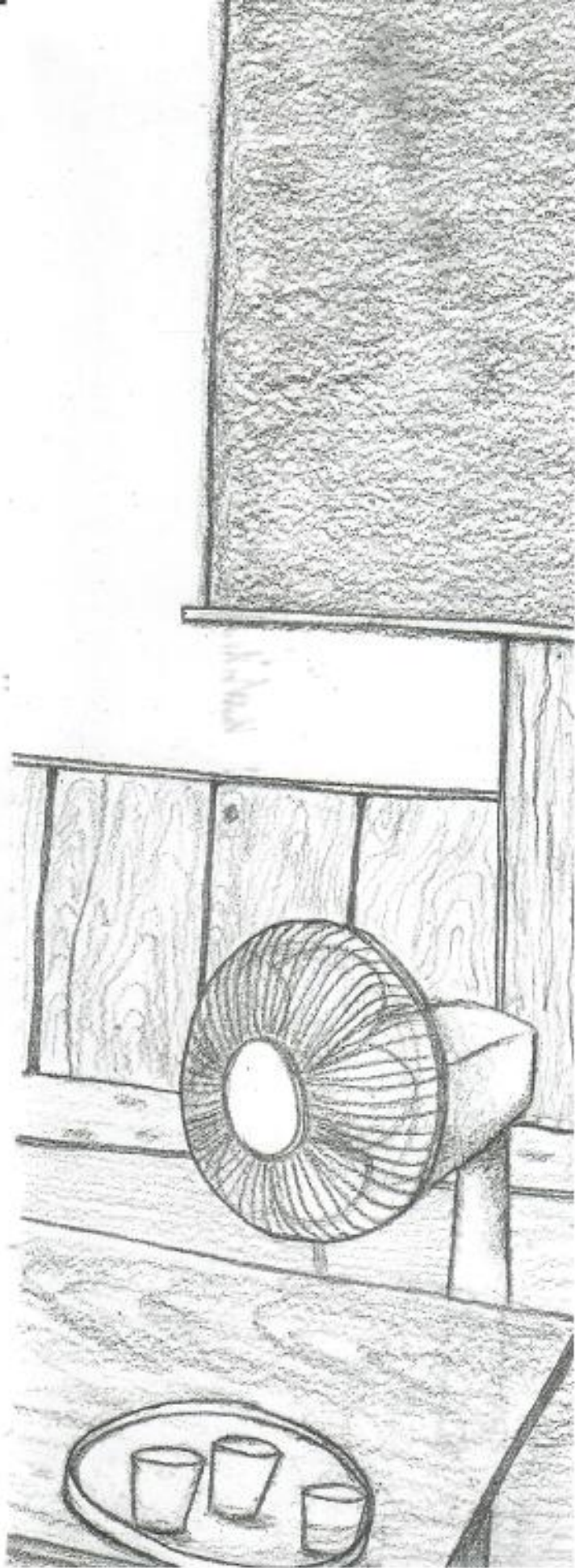
「きょうは、おつかれさん、冷たい麦茶でも飲まんか。」

浜からもどったほくたちに、後藤先生が声をかけてくれた。

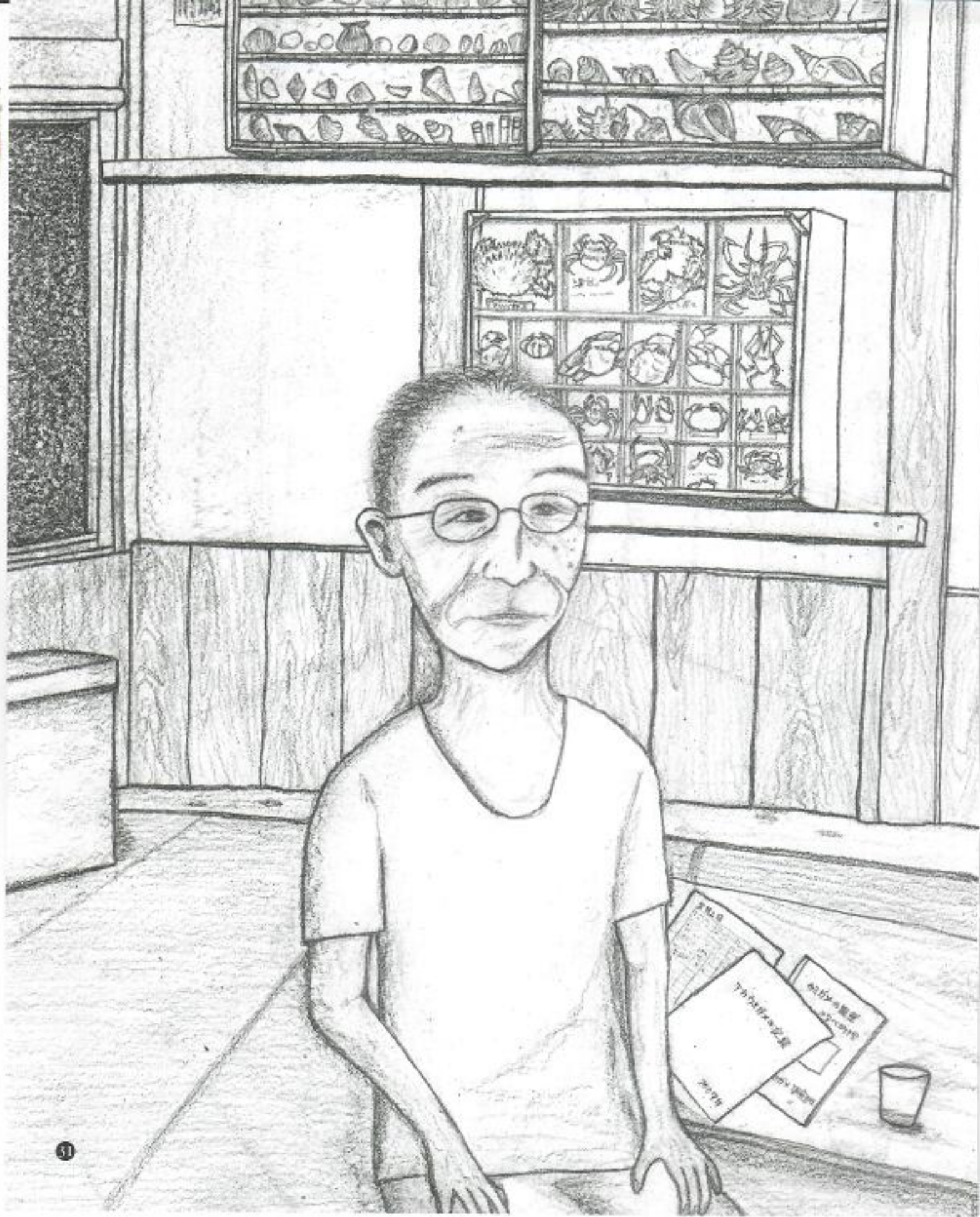
「この浜はなあ、日本で二番目にようさんウミガメが上陸したんや。そやけど昭和三〇年代かなあ、都会の企業が別荘地にするため土地を買いはじめたんや。このままで浜もウミガメもあかんようになってしまいうて、みんなで和歌山県に書類出して、千里の浜を天然記念物にしてみるたんや。それから山内地区の青年団が最初にパトロールを始めて、今はみなべ町の青年団みんなでひきついできてるんや。」

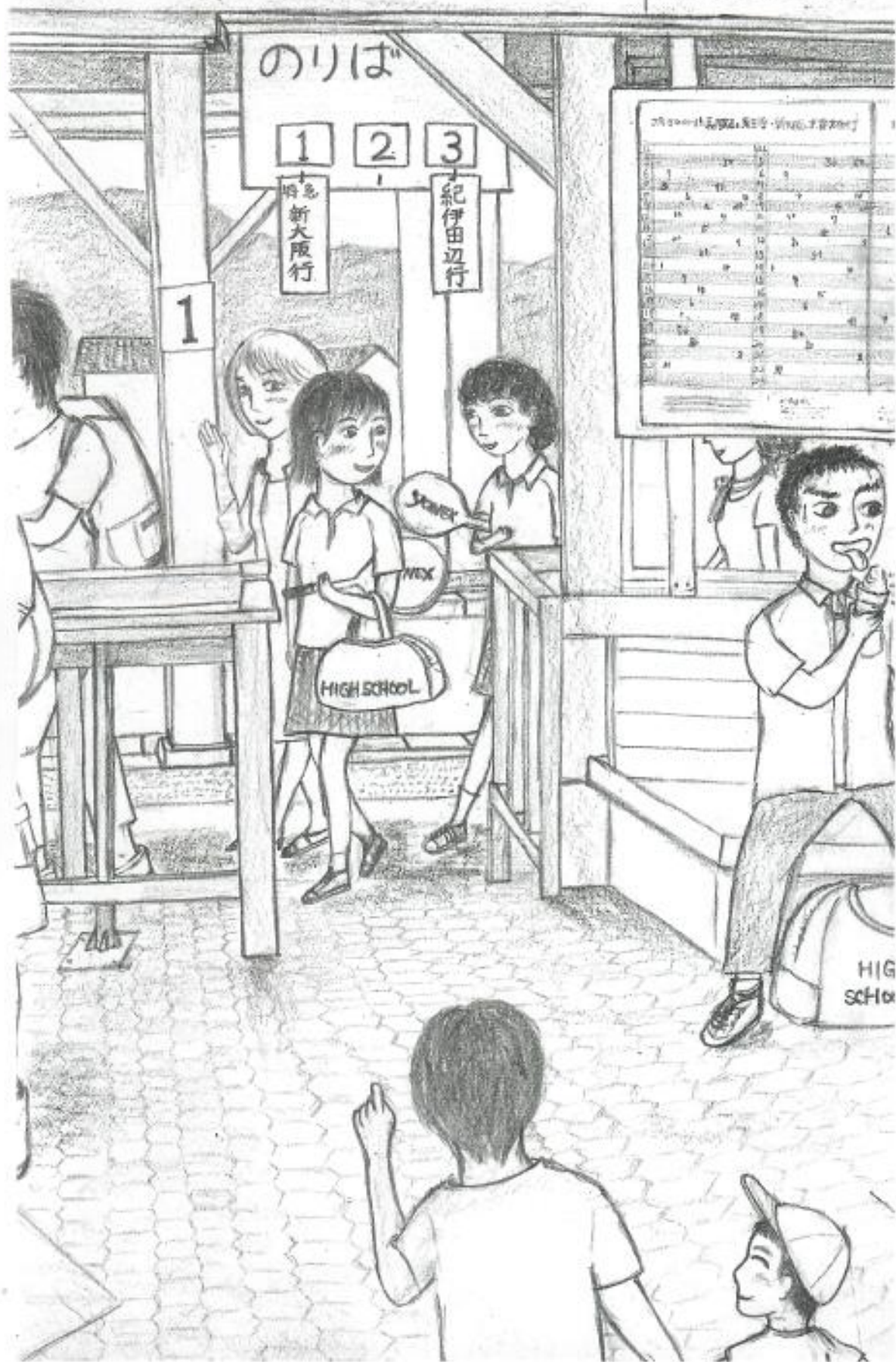
後藤先生は続けた。

「それでも、むかしの三分の一ほどに砂浜へってしもたんやで。きよ年の台風のときは、砂浜が波につかってしても、ウミガメの卵、全部あかんようになってしまった。理由はわからんけど、ウミガメもへった。当時の山崎町長は『浜は天然記念物になったけど、ウミガメは観光資源にしたらあかん』ていきった。これは守らなあかんと、わしも思う。ウミガメを見にくる人たちも、ちゃんとマナーを守ってくれるようになって。むかしからの美しい浜が、これからもずうっと残ってくれたらええんやけどなあ。」







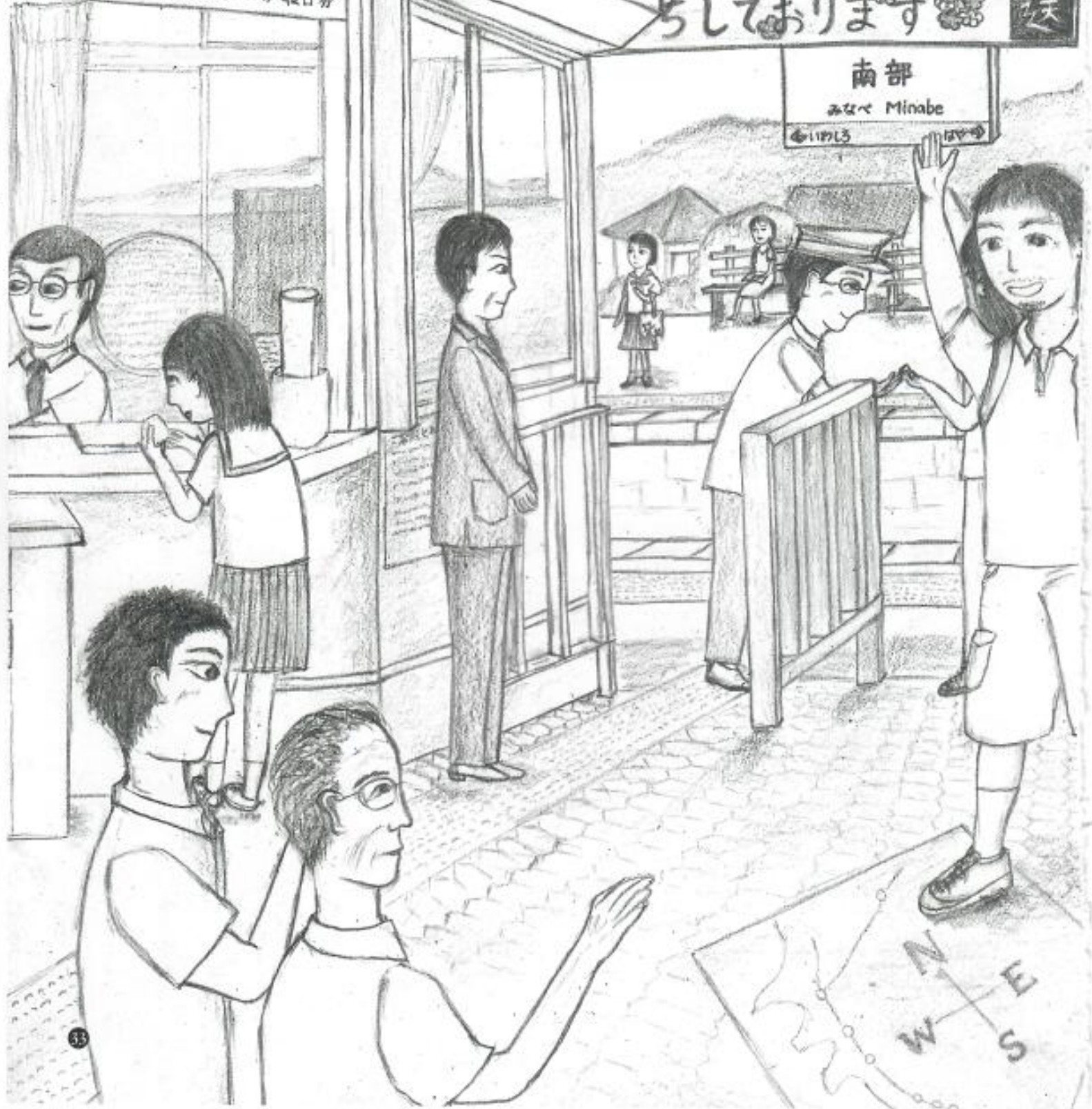


「後藤先生、ひさしぶりです。」  
「あたらしいメンバー、つれてきました。」  
日本ウミガメ協議会の人たちが、毎年、夏休みにウミガメの調査を手つだいにきてくれます。  
ほくたちは、南部駅までむかえに行った。

特急券(指定席・自由席)グリーン券寝台券

送  
ちしております

南部  
みなべ Minabe  
11913



星

# 紀州みな



「みんなちはー」  
そのとき、チリーンとほくの足もとに鈴がこるがってきた。  
「あっ、すみませんー」  
ほくは、その鈴をひろい、女の子に渡そうとした…  
ハッー  
ほくは気づいた。

ようこそ日本一の梅の

一目百万 香り十里

青部 木

あのときの…、夢の…

ほくたちは…

いや、千里の浜もウミガメも…、すべてのものが…、  
ずっとずっと続いているんだってことを。

ウミガメといえば浦島太郎、あの大きい甲羅の上に乗って、海底にあるという竜宮城に一度行ってみたいですね。むかしは浜辺や沿岸でたくさんのウミガメが見られたので、こんなお話が生まれたのでしょね。

ウミガメは爬虫類で、世界中の暖かい海に7種類いるといわれています。そのうちの3種類は日本の砂浜に卵を産みにきます。アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイです。絵本にでてくるのはアカウミガメで、アオウミガメはもっと体が大きくて、暖かいところにいます。タイマイは奄美諸島より南で産卵しますが数が少なく、甲羅はベッコウ細工で有名です。めがねのふちやかんざしなどに使われてきました。

ところが、最近は砂浜が減ってしまい(コンクリートの護岸もありますね)、ウミガメが上陸できなくなりました。町の明かりもウミガメの方向感覚をなくしてしまい、うまく上陸できません。やっと砂浜に上陸して産卵しても、四輪駆動車に踏みつぶされたり、動物に食べられたりもします。また泳いでいるうちに、魚を捕るための網にかかって死んでしまうこともあります。アカウミガメはアメリカ沿岸にまで泳いでいくのですよ。

ウミガメが減ったので、世界中で保護しようといろいろな工夫を始めましたが、いまではパンダと同じくらいの絶滅危惧種になってきました。

産卵の時期は浜辺に車を入らない、踏まれないように卵の回りをアミで囲む、海に明かりが届かないよう下側だけ照らす、魚捕りの網にウミガメが逃げだせる穴を開ける、そんな工夫をしています。また、夜に孵化して海に帰る小亀を昼間海に放流しないなど、調査と観察のデータをウミガメの保護に役立てています。

和歌山県では、みなべ町の千里浜の他、新宮市王子浜、那智勝浦町下里、御坊市塩屋など数カ所でウミガメの保護に取り組んでいます。絵本の作者もみなべ町に住んでいます。

むかしのよう、この広い海を、ウミガメがゆうゆうと泳いでいる日を夢見てー。

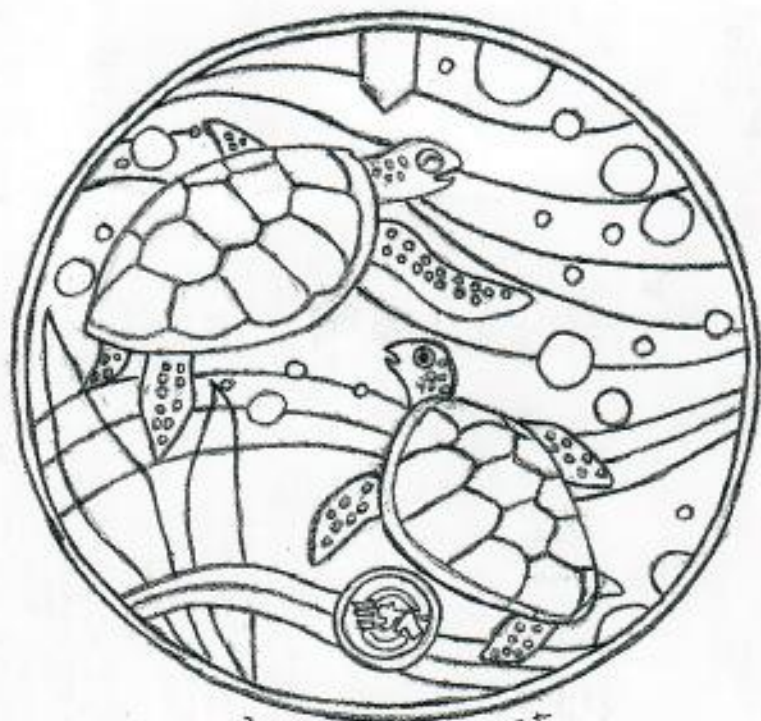
わかやま絵本の会 代表 松下千恵

2008年6月1日発行 わかやま絵本の会 郷土絵本NO.87 『ウミガメよ いつまでも』

文と絵/土井邦江、協力/松下千恵

お世話になった方々/後藤清(みなべウミガメ研究班)、前田一樹(みなべ町役場 教育学習課)、尾田賢治(みなべ青年団)、千里治勝会の皆様(千里観音堂の管理や清掃活動)、土井定夫(作者の夫)

参考資料/ウミガメ保護ハンドブック、動物の大世界百科など



みなべ町のマンホールのふた

わかやま絵本の会発行 郷土絵本NO.87

定価 700円(税込)